今日からできる『社会貢献』

社会の宝を育てる

第3回

NTTデータ経営研究所
村橋 保春

社会の宝：子どもたち

昭和の時代を懐かしむ写真集を見ると必ず子どもたちが走り回っている風景に出くわす。子どもたちが家の中で遊ぶ道具が将棋程度しかなかった時代は、子どもたちの遊び場は校庭であり、公園であり、商店街であり、路地裏であった。子どもたちの数も多く、とにかく街なかでは子どもが目立つ時代であった。

現代は少子高齢化の時代といわれて久しい。戦後日本の出生数のピークは終戦直後のベビーブームと1970年代前半の第2次ベビーブームであり、第2次ベビーブームに向かう1960年代を除き出生数はほぼ右肩下がりに減少を続けている。ベビーブームにおける年間出生数は270万人を超えていたが、近年は100万人前後に推移している。

医療技術の向上等社会的進歩も進み、人口全体では少子化の激しい減少を高齢化傾向がある程度打ち消している。しかし、生産年齢人口（15～64歳）は少子化同様、厳しく減少を続けている。生産年齢人口は1995年には8000万人を超えていたが、翌年から減少傾向を示すこととなった。子どもたちのにぎやかな動きや歓声は、人々に元気を与える。こうした数値を確認するまでもなく、少子化の進展は人々や社会から活力を失わせる。

子どもたちは社会の宝であると多くの人たちが強く感じる時代となった。社会の宝である子どもたちを大切に、しっかりと育てなければならない。それではどのように育てるか。

イクメンという言葉がある。積極的に育児に関わり、育児そのものを楽しんでいる男性を称していう。育児休暇制度を男性にも適用するなど、社会制度としても後押しをしている。こうした傾向は大いに歓迎すべきことである。

しかし、本論では子どもたちとの関わりの最小単位を「お母さんと子ども」と捉えて、社会貢献のあり方を考えたい。子どもの成長過程でもっとも手間のかかる時期は乳幼児（誕生から就学前まで）の時期である。この時期の「お母さんと子ども」をどのように支援したらよいか、事例を通して考えていきたい。

母子を優しく包み込む地域社会

都道府県別離婚率では東京都や大阪府とともに沖縄県も上位に位置する。東京都などの大都市は女性もある程度の収入があり経済的に自立しているため、離婚に踏み出すことができる。沖縄県は離婚しても地域社会が支援してくれる、とくに子どもは地域みんなで育ててくれる、だから離婚に大きな障害はない。やや眉唾な解釈ではあるが、沖縄の地域社会と子どもたちの関係を示していると考える。

多世代同居家族や、兄弟の多い家族には、育児に関する実践的なノウハウが十分にある。お母さんが少しだけ子どもと離れて過ごす時間を作ることもできる。核家族化、兄弟の少数化が進むと、こうしたノウハウやサポートを家族から受けることができなくなる。こ

こで登場するのが地域社会である。

子育て支援のヒント

まず、育児に関する実践的なノウハウの提供について考えたい。ＩＣＴ（情報・通信に関わる一般的技術）が格段に発展し、多くの情報がインターネット等で大量に入手できる。しかし、子育てだけは教科書どおりにはいかない。子どもは全く想像できない行動を取る。相談相手がいないと、むずかる子どもを見てお母さんは一人悩み、悩みを深めてしまう。

こうした問題に取り組んでいるのが「親子の集い」である。青森駅前の商業施設のなかに青森市が設置した親子の広場「さんぽぽ」がある。3歳までの子どもが親や祖父母といっしょに遊べる無料のスペースである。多くは母子の組み合わせで、子どもを遊ばせながら母親同士で交流を深め、情報交換をしている。保育士による相談機会も設け、母親の悩み解消の役割も果たしている。授乳・おむつがえのコーナーもあり、街中に出かけるお母さんの不安解消にも役立っている。

同様の事例として、京都伏見大手筋商店街が運営する親子広場「ぱおぱおの家」を紹介する。

商店街のなかにあって、週2回、おむつ交換、授乳、親子の交流の場として場所を提供している。こちらは登録制で利用に当たって月額３００円の登録料が必要である。料理講座や読み聞かせなど、親子参加の講座を数多く行っている。

これらの事例はともに、街なかにある。家の中で二人きりの母子にとって、多くの人たちと接する機会は、大いに気持ちが発散することとなる。街なかは子どもたちの社会性を刺激する学習の場でもある。

次に、お母さんが少しだけ子どもと離れて過ごす時間を作ることについて考えたい。子どもと少し離れたい理由は仕事と趣味があげられる。もちろん、「お母さん」を休みたいというのもあるだろう。こうした場合には、託児サービスが求められる。

託児サービスはビジネスとして実施されている事例が多い。子どもを預かることから、保育士の資格が求められる。短期間や臨時に託児したいニーズには融通を利かせやすい認可外保育所が活用されている。地元に支持されている事例として、甲府市の子育て支援ハッピーキッズを取り上げる。

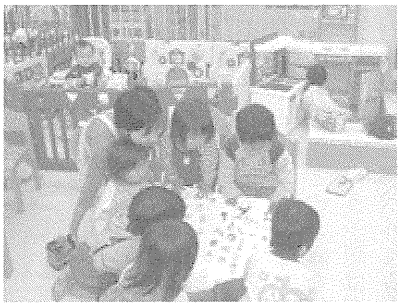
同保育所はかつて保育士として働き、自らの子育てのために保育士としての仕事を休んでいた方々が、地域社会の機能として託児サービスを始めた事例である。中心市街地にあることから、商店街で買い物をする母親や事務所に勤める母親に活用されている。

親子の集いの場に取り組む

母子の子育て支援という社会貢献のうち、信用組合が取り組みやすいのは、親子の集いの場作りであると考える。子どもを連れた母親にとって、子どもの自由な振る舞いが周辺に影響を与えることに強く気兼ねしている。

母子が地域社会との関係性を持つきっかけを信用組合が後押ししていただけるとなによりありがたい。親子の集いの場となる空間はないだろうか。読み聞かせや演奏など、ほかの要素を組み入れて、地域社会の輪を広げ、太くしていく役割を担っていただきたい。

ぱおぱおの家（ＨＰより）



ハッピーキッズ（提供写真）